



令和7年度 学校推薦型選抜
(きのくに教員希望枠) (地域【紀南】推薦枠)

小論文 問題冊子

注 意 事 項

1. 監督者の指示があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は、次の募集区分の通りである。

「学校教育教員養成課程」
3. 落丁、乱丁及び印刷不鮮明なものがあれば、すぐに申し出ること。
4. すべての解答用紙に必ず本学の受験番号を記入すること。
5. 解答は、問題番号に対応する解答用紙に記入すること。
6. 記入した解答用紙は、裏返して机の上に置くこと。
7. 解答用紙の中の※の欄には記入してはいけない。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

1

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「利他」の問題を考える際、私がとても重要だと考えている一冊があります。
頭木弘樹かしらぎ ひろきさんの『食べることと出すこと』です。

頭木さんは、二十歳のときに潰瘍かいよう性大腸炎を患い、五十代になった今も、病
気と付き合いながら生活しています。そのため、何でも食べられるわけではな
く、「これを食べると激しい腹痛や下痢になる」というものがあります。

あるとき、頭木さんは仕事の打ち合わせで、食事をするようになりました。
指定の店に行くと、すでにお勧めの料理が注文されており、頭木さんが選ぶこ
とができない状態でした。注文された料理が出てくると、それは食べることが
できないものでした。

相手は「これおいしいですよ」と、頭木さんに勧めます。ちなみに、その人
は頭木さんが難病を抱えており、食べることができないものがあることを知っ
ています。頭木さんは「すみません。これはちょっと無理です」と答え、食
べられないものであることを伝えました。

相手は「ああそうですか。それは残念です」と答え、その場はいったん収ま
ったものの、しばらくすると、また同じものを勧めてきました。「少しくらいな
ら大丈夫なんじゃないですか」と言って、食べることを促します。難病を抱え
る頭木さんにとって、その料理を口にすることは、いくら「少しくらい」であ
っても、大変な不調をきたすことにつながり、どうしてもできません。そのた
め、手を付けないままにしていると、周りの人まで「これ、おいしいですよ」
とか「ちょっとだけ食べておけばいいじゃないですか」とか言いながら、同調
圧力を強めてきます。その場は、気まずい雰囲気になり、結局、その相手から
は仕事の依頼はなくなったと言います。

この相手の行為は、「利他」と「利己」の問題を考える際、重要な問題を含ん
でいます。

確かに相手は、頭木さんに「おいしいものを食べさせたい」という利他的な
思いがあったのでしょうか。だから、自分で店を予約し、お勧めの料理を前もつ
て注文するという手間のかかることを行ったわけです。

ただし、いくら他者のことを思って行ったことでも、その受け手にとって「あ
りがたくないこと」だったり、「迷惑なこと」だったりすることは、十分ありえ

ます。実際、頭木さんにとって、食べられないものを食べるように勧められることは、迷惑どころか、場合によっては命の危険にさらされる危険な行為です。当然、受け入れることはできません。

しかし、相手の「お勧め」を断ると、場が気まずくなります。そして、自分の思いが受け入れられなかった相手は気分を害し、徐々に「利他」の中に潜んでいた「利己」を前衛化させていきます。頭木さんの病気を熟知している上、「食べられないものだ」ということを知らされても、時間が経つと「少しぐらい大丈夫なんじゃないですか」と言って、自己の行為を押し付けようとします。こうなると、「この料理を食べさせてあげたい」という「利他」が、「自分の思いを受け入れないなんて気に入らない」「何とかおいしいと言わせたい」という「利己」に覆おおいつくされ、頭木さんに襲いかかってきます。利他的押し付けは、頭木さんにとっては恐怖でしかありません。

(出典：中島岳志 (著)『思いがけず利他』ミシマ社、2021年、105-107ページ、一部改変)

問1 筆者は、「利他」と「利己」の関係をどのように捉えていますか。本文の内容に触れながら200字程度で説明しなさい。

問2 日常生活において、「他者のことを思ってしまったことでも、その受け手にとって『ありがたくないこと』だったり、『迷惑なこと』だったりすること」は、しばしば起こります。学校における子ども同士に生じる同様の場面を具体的に想定し、もし、あなたが教師であれば、その場面でどのように対応するのか、理由も含めて400字程度で述べなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

情報技術の進展は私たちをどこに連れて行くのだろうか？ 今では誰もがスマートフォンの画面に見入っている。私が携帯電話を初めて持ったのは2007年。以後、携帯がスマホになり、ソーシャルメディアが浸透し始めたのは12年ごろらしい。これらの技術は、人々がコミュニケーションを取る方法を変え、それによって、人との付き合い方をも変えている。

紙と印刷技術がなかった時代、人々は、あらゆる事柄に関して、自分たちの脳内に収められた記憶に頼るしか方法がなかった。今では、紙以外にもさまざまな記憶媒体があり、その容量は日々増加している。

大量の情報の蓄積という意味では、図書館はその代表だった。書物、論文、雑誌、新聞記事など、なんでも保存されている。しかし、そこから自分の得たい情報を見つけ出すには、自分で探さねばならなかった。そこへ、検索エンジンというものが出来た。読み込んだ大量の情報から、探している人が欲しいと思われるものを、瞬時に出してくれる。初めは、自分の名前を入れて尋ねたら、知らない人たちのことばかり大量に答えてきた、などとバカにされていたが、どんどん改良が進んでいるようだ。

そして、生成AI（人工知能）である。これも世に出た当初は、役に立たないとバカにされたが、改良が進んでいる。本当に学術論文を書いてくれたり、次の研究題目に何を調べばよいかまで教えてくれたりするものもあるそうだ。古今東西で出版された研究論文を大量に読み込んで学習させれば、こんなこともできるようにはなるのだろう。

そうすると、人間は何をするのか？ 記憶も検索も作文も、AIに丸投げのアウトソーシングが可能になったあとは、どんな人間が育ち、どんな社会を作るのだろうか？ おそらく、今までとは違う人生観、世界観を持つ人たちが育つようになり、まったく違う社会になるのではないか。

人類学者としてこの変化を見ると、これは、狩猟採集で生計を営む生活から、農耕・牧畜・定住の生活様式に変わったときぐらいの大きな衝撃をもたらす変化なのではないかと思う。

狩猟採集生活は、自分で食料を生産しない。自然の恵みを求めて放浪し、とれた分だけで満足する。大量にとれば、みんなで分けて大宴会。とれなけれ

ば飢えて、ときには死ぬ。周囲の自然を熟知し、捕食者から身を守り、他の人間たちとうまくやっていく術（すべ）を身に付ける。これは頭を使う大変な暮らし方だ。

しかし、「今、ここ」での見返りが無いのに、少しずつこつこつ働いて努力するという事はしない。狩猟採集生活では、こちらがいかにかに知恵を絞ろうと、自然の恵みがあるときにはあるが、ないときにはない。

目の前に獲物となる動物や食べられる植物があれば、一生懸命働いてそれを手に入れようとする。しかし、すぐに見返りが無いのに、将来のために働くということは考えられない。

これを劇的に変えたのが、1 万年前の農耕・牧畜・定住生活の始まりである。農耕も牧畜も、人間が自然を改変して食料を作り出すので、こつこつ働けば、それだけ、その先の成果が増える。努力した成果が、すぐその日に得られるのではない。しかし、将来には得られるだろう。その未来のために「こつこつ働く」。

今の私たちは、今すぐに何かを得られるわけではなくても働く。来年の収穫か、給料日か、ボーナス支給か、よりよい就職口か、将来にはいいことがあるだろうと思って、今、こつこつ働く。狩猟採集民には、こんなことが理解できない。逆に農耕民には、こんな狩猟採集民が理解できない。

しかし 1 万年前に農耕・牧畜・定住生活を採用した集団は確かに成功した。そして暮らし方が変わり、毎日の生活リズム、欲望のあり方、目標の持ち方、社会集団のあり方など、すべてが以前とは変わったのだ。

これと同じくらいの大転換が、情報技術の発展によって起こるのではないだろうか。物も人も移動せずすむことが増え、リアルとバーチャルという新概念が出現し、AI はものを考えるという行為を解体しつつある。この変化によって職業や働き方、人間生活のあり方すべてが変わるだろう。「こつこつ働く」価値観もなくなり、文明は次のフェーズに入る予感がする。

(出典：長谷川眞理子「生成 AI 時代の世界観 消える「こつこつ」の先」毎日新聞 web 版、2024 年 6 月 16 日付記事)

問1 生成AIを活用する児童・生徒の学びについて、その活用の方法と可能性、課題について、あなたの考えを400字程度で述べなさい。

問2 AI技術のさらなる進歩により、近未来～未来の人間に必要とされる能力はどのように変わっていくのかについて、あなたの考えを400字程度で述べなさい。